

総合報告書

<要約>

本事業は、この 3 年間、持続的基礎保健医療の強化や社会的支援体制の確立や行動変容コミュニケーション・介入 (BCCI) を通して、インゲレンゲレ郡及びムラリ郡の人々の HIV 感染に係るリスク行動を減少させることに貢献した。

最初に、3 村での VCT センター建設、VCT カウンセラー 16 名の育成支援、3 村の診療所が実施する巡回診療への燃料補助、各診療所及び各簡易診療所への資材供与、3 診療所の産婦人科・小児科病棟の改修を行い、基礎保健システムの強化を行った。住民 1,790 名 (うち 220 名が HIV 陽性) が VCT サービスを受けるとともに、離村住民のべ 2,693 名以上が巡回診療によって性感染症 (STI) や日和見感染症 (OPI) 治療を受けることができた。一方、基礎保健に関係する政府職員や住民代表、438 名を研修した。さらに、コミュニティー・カウンセラー 123 名の育成によりホームケア (家庭介護) 体制も確立した。これにより、VCT カウンセラーのケアや啓発活動による差別の軽減なども影響し、HIV 感染者が自主的に集い、自助組織を作る環境となった。

次に、村落政府職員、学校教師、宗教指導者、地域に根ざした医療関係者、村指導者、村落行政長官といった各村で影響力のある関係者 845 名に研修を行った。また、コミュニティー・エドューケーター 125 名を研修し、強化研修と定例会合も催した。これらにより、住民主導による啓発教育が各村で実施されるようになった。さらに、2 村でリソースセンターが完成し、住民への情報発信源も整備された。

更に、学校委員会や学生ピア・エドューケーター 391 名と学校に通わない若者 177 名への研修を行った。これにより、それぞれの学校や地域で啓発活動を自主的に行うようになった。また、のべ 83 名の中高校生に奨学金の支援を行うと共に、13 の小規模ローングループ (構成員総数 138 名) に物品提供による小規模ローンを実施して、若者や女性がリスク行動を回避する環境整備を行った。

最後に、マサイ族酋長・リーダー達、男性・女性・若者ピア・エドューケーター 139 名への研修を行い、行動様式の異なる同コミュニティーへの啓発活動を促した。また、HIV 感染のリスクが高いゲストハウスやバーの店員 132 名を研修すると共に、ポスターやステッカーや看板などの行動変容教材を通してリスク回避の対策を行った。

<業務の実施方法・業務関連事項>

(3年間のプロジェクト計画一覧表(PDM)による計画及び今年次の実績の比較)

プロジェクト目標
<p>ンゲレンゲレ郡及びムラリ郡において、人々の HIV 感染に係るリスク行動が減少する。</p>
活動計画およびその実績
<p>計画 活動 0-1 コミュニティ・リーダーに対する PRA トレーニングを実施し、PRA 及びベースライン調査を行う。</p> <p>実績</p> <p>ベースライン調査には、National Institute for Medical Research のコンサルタント(Dr H.W Makunde)からの技術協力を得ており、報告書は 2004 年 12 月に完成した。プロジェクト対象地域のうち 14 の村に住む男性、女性、学生、学校に通わない若者、ゲストハウスイワーカー、マサイ族計 900 人を対象にベースライン調査を実施した。1 月 26 日から 2 月 13 日にかけて、質問票による定量調査及び PRA の手法の一つであるフォーカス・グループ・ディスカッションを用い、データ収集を行った。調査には住民の代表も参加し、調査手法について実践的に学んだ。調査の結果は、今後の計画及び活動に反映させていく。</p>
成果 1:
<p>性感染症及び HIV/AIDS に関する政府の基礎保健システムが強化され、また PLWHA への家庭介護システムが確立される。</p>
<p>計画 活動 1-1 カウンセリング・HIV 抗体検査所(VCT)3ヶ所(ンゲレンゲレ郡 1ヶ所、ムラリ郡 2ヶ所)、性感染症科(ンゲレンゲレ郡 1ヶ所、ムラリ郡 1ヶ所)を設置または拡充し、診療所、移動診療車(ンゲレンゲレ郡 1つ、ムラリ郡 1つ)を含めて必要な医療器具、薬剤を提供する。</p> <p>実績</p> <p>1-1-1. VCT センター建設</p> <p>VCT センター3ヶ所が 2004 年 9 月にすべて完成した。独立トーチ 開催中の 2004 年 9 月 17 日に VCT センター開所式がンゲレンゲレで開催された。各 VCT センターとも各保健所の敷地内にあり、待合室、カウンセリング室、検査室の 3 部屋から成る。ンゲレンゲレ VCT センターは 6 月より保健所の一室を借り、ムラリ及びメレラ VCT センターは 9 月から VCT センターにて稼働している。のべ 1,790 名がカウンセリングを受け、220 名が HIV 陽性と診断された。詳細は、Appendix A 参照。</p> <p>1-1-2. HIV テストキット供与</p> <p>VCT のための HIV 検査キット(CAPILUS3 箱と DETERMINE1 箱)を各 VCT センターに寄贈した。中央政府による供給を補完するため、県・郡保健医療部からの要請に基づき実施した。詳細は、Appendix B 参照。</p> <p>1-1-3. 検査器具供与</p> <p>対象地域の診療所及び簡易診療所において、性感染症(STI)や日和見感染症(OPI)の適切な診断、治療が行われるようにするため、基本的な検査器具一式(細菌培養器等)を提供した。詳細は、Appendix B 参照。</p> <p>1-1-4. 薬剤供与</p> <p>STI や OPI のための薬品を郡薬品部に寄贈した。中央政府による薬品供給を補完するため、州・郡保健医療部からの要請に基づき実施した。詳細は、Appendix B 参照。</p>

1-1-5. 巡回診療の燃料補助

診療所が実施する移動診療車への燃料を支援した。各村で移動診療が実施され、巡回回数 658 回以上、2,693 名以上が診療を受けた。性感染症 (STI) や日和見感染症 (OPI) の治療の他、マalaria や下痢症対策も行った。当事業は、2006 年 6 月末で同支援を終え、7 月からは県保健行政が燃料予算を取り、継続して行っている。

1-1-6. VCT カウンセラー育成

VCT カウンセラー 16 名に対し、4 週間の VCT カウンセラー研修 (AMREF (African Medical Research Foundation) 主催) への参加を資金的に支援した。うち 8 名が 2005 年 1 月 19 日～2 月 13 日の研修、8 名が 2006 年 1 月 30 日～2 月 24 日の研修に参加した。研修では、VCT カウンセラーとして実務的に必要な知識を学んだ。参加者は、Appendix D 参照。

1-1-7. 産婦人科・小児科病棟の改修

ンゲレンゲレ、ムラリ、メレラの各診療所の産婦人科・小児科病棟を母子感染予防 (PMTCT) に対応できるように改装を行った。

1-1-8. 巡回 VCT

2006 年 1 月 9 日、13 日、17 日、19 日～21 日の 6 日間、VCT カウンセラー 3 名と共に移動 VCT サービスを行った。離村の住民は、VCT センターのある郡の中心の村になかなか行けないので移動 VCT サービスを望んでいた。今回、ンゲレンゲレの 3 村とムラリの 3 村で実施し、47 名がカウンセリングと検査を受け、6 名が陽性という結果であった。今後の継続的实施に向け、各県保健行政官と検討していく。

計画 活動 1-2 保健所職員 80 人、薬局スタッフ 30 人、各村落委員会 (基礎保健委員、HIV/AIDS、保健職員) 委員 300 人のトレーニング及びフォローアップを行う。

実績

1-2-1. 研修

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix E を参照。

診療所及び簡易診療所職員 (20 名)

薬局職員 (33 名)

村落基礎保健委員会 (64 名)

看護師 (58 名)

村落 HIV/AIDS 委員会 (170 名)

村落保健職員 (93 名)

1-2-2. フォローアップ研修

事業期間中、以下の対象者をフォローアップ研修した。詳細は、Appendix E を参照。

診療所及び簡易診療所職員 (37 名)

薬局職員 (38 名)

村落基礎保健委員会 (35 名)

村落 HIV/AIDS 委員会 (72 名)

基礎保健職員 (26 名)

計画 活動 1-3. コミュニティー・カウンセラー156人を育成し、HIV感染者に対するホームケアを実施する。

実績

1-3-1. 研修

事業期間中、コミュニティ・カウンセラー123名(インゲレンゲレ郡67名、ムラリ郡56名)に研修した。詳細は、Appendix Fを参照。

1-3-2. フォローアップ研修

事業期間中、コミュニティ・カウンセラー123名にフォローアップ研修した。詳細は、Appendix Fを参照。

1-3-3. 四半期会合

各地で定例会合を実施した。会合では、カウンセリング技術、報告手段、コミュニティ、カウンセラー、VCTカウンセラー3者間の連携等について話し合われた。日程の詳細は、Appendix Fを参照。

1-3-4. 資材供与

各村で HIV 感染者に対するホームケア活動のために使用する自転車と、感染者の介護に必要な基本的な衛生キットを配布した。

1-3-5. ハンドブック作成・供与

第2年次に、カウンセラー用ハンドブックを作成し、カウンセラーに配布した。政府や他の NGO からのカounseling 専門家チームによって 156部が作成された。正確な知識がすべてのコミュニティに伝わるように、カウンセラーの参考書として作成した。内容としては、HIV/AIDS、STI、カウンセリング、PLWHA への家庭介護に関する基礎知識である。また、VCT サービスを宣伝するため、パンフレット 3,000部を作成し配布した。VCT センターへ来るクライアントの人数を増やし、すべてのコミュニティの差別や偏見を減らすことがその目的であった。

2006年12月12日から15日および19日、専門家5名を集めてコミュニティ・カウンセラー用ハンドブック及びコミュニティ・エドゥケーター用マニュアルの改訂作業を行った。HIV/AIDSの新しい知識を加えると共に、読者により親切なものにするよう心がけた。152部作成し、各関係者に配布した。

1-3-6. スタディーツアー

2005年6月11日～19日、長年 HIV/AIDS 対策を実施しているカゲラ地方にスタディーツアーを実施した。コミュニティ・カウンセラー6名、VCT カウンセラー2名が参加し、VCT センターとリソースセンターを視察し、また HIV 感染者のグループも訪問した。カゲラから多くの教訓を得て、インゲレンゲレとムラリでの活動に役立てることができた。

1-3-7. 広報活動

第2年次に、VCT センターを宣伝するパンフレットを 3,000部作成し、配布した。VCT センターを訪れる人を増やすため、また住民の偏見を減らすために行った。

1-3-8. HIV感染者への支援物資

第1年次、2,500張の蚊帳を購入した。これは、HIV感染者及びその家族等、HIV/AIDSの影響を受けている人々に提供するものである。その準備として、プロジェクト地域の全42村を対象に、モロゴロ農村県行政の協力を得て、蚊帳の正しい使用方法に関するトレーニング(ビデオや実地演習)を行った。

第 2 年次、研修を受けたコミュニティー・カウンセラーによって、のべ 129 名の AIDS 患者に毎月食糧と物資の支援を行った。また、患者は診療所や簡易診療所で無料の薬品提供も受けている。本事業では、日和見感染症のための薬品を供給している。さらに、家庭介護サービスを強化するため、レインコート、長靴、懐中電灯を 126 名のコミュニティー・カウンセラーに提供した。これにより、コミュニティー・カウンセラーが夜でも雨期でもクライアントを訪問でき、コミュニティーへの家庭介護サービスを確保できるようになった。

第 3 年次、HIV 感染者 336 名に対して、各種食料品、ベットシーツ、毛布、石鹸、蚊帳等の支援物資を配布し、彼らと家族の日常生活を支援した。

年月	ンゲレンゲレ	ムラリ
2005 年 5 月	52 名(男 24 名 女 28 名)	47 名(男 21 名 女 26 名)
2005 年 10 月	50 名(男 21 名 女 29 名)	52 名(男 16 名 女 36 名)
2006 年 2 月	83 名(男 41 名 女 42 名)	52 名(男 15 名 女 37 名)

第 4 年次、HIV 感染者 511 名に対して、各種食料品、ベットシーツ、毛布、石鹸、蚊帳等の支援物資を配布し、彼らと家族の日常生活を支援した。

年月	ンゲレンゲレ	ムラリ
2006 年 4 月	83 名(男 41 名 女 42 名)	52 名(男 15 名 女 37 名)
2006 年 8 月	89 名(男 30 名 女 59 名)	45 名(男 15 名 女 30 名)
2006 年 10 月	82 名(男 30 名 女 52 名)	39 名(男 10 名 女 29 名)
2006 年 11 月	82 名(男 30 名 女 52 名)	39 名(男 10 名 女 29 名)

1-3-9. HIV 感染者の組織編成

2005 年 6 月 10 日、当事業ンゲレンゲレ事務所にて、12 名の HIV 感染者が、自主組織編成のために初めて集まった。毎月 5 日に集まり、今後のことを協議する約束をした。

2005 年 8 月 3 日～5 日、ンゲレンゲレで HIV 感染者のための研修を実施した。17 名が参加し、HIV 感染者へのケアとサポート、HIV 感染者の栄養、HIV 感染者への所得創出活動などを学んだ。研修を受けた HIV 感染者は、将来的にコミュニティー・カウンセラーになることを想定している。

2005 年 9 月 14 日、ムラリでも 5 名の HIV 感染者が初めて会合を持った。月に一度定期的に集まることを決めた。

2005 年 11 月 7 日、モロゴロにて、ンゲレンゲレとムラリの HIV 感染者のための共同会合を開いた。編成して日の浅いムラリ側にとっては、大変有益であった。会合では、HIV 感染者を支援する NGO としての登録可能性、当事業終了後の将来的計画作り、当事業終了後の他団体による支援などについて話し合った。

2006 年 2 月 6 日～10 日、ンゲレンゲレとムラリで新規メンバーへの研修及び既存メンバーへのフォローアップのための研修を開催した。

会合は各地ではほぼ毎月 5 日に開催され、HIV 感染者として生きていくための知識や方法などが話し合われた。会合に出席したある新会員は会合について以下のように述べている。「以前は想像できなかったけど、この会合に参加するようになって、前向きに生きて行こうという気になってきた。今は幸せを感じ、すぐには死なないと確信している。」

ンゲレンゲレのグループは、2006 年 10 月末現在、27 名(男 6 名 女 21 名)のメンバーから成り、WAVUNGE(ンゲレンゲレの HIV 感染者)と命名した。一方、ムラリのグループは、2006 年 10 月末現在、23 名(男 9 名 女 14 名)のメンバーから成り、TUSHIKAMANE(一緒になろう)と命名した。

成果 2

住民が地域での啓発教育に参加し、HIV/AIDS に関して正しい知識を身に付けるようになる。

計画 活動 2-1. プロジェクト委員会の委員 30 人、政府職員 30 人、教師 156 人、宗教指導者 100 人、地域に根差した医療関係者 300 人、訓練者 (ToT) 27 人、住民リーダー 129 人を対象に HIV/AIDS に関するトレーニング及びフォローアップを実施する。

実績

2-1-1. 研修

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix G を参照。

村落政府職員 (38 名)
学校教師 (135 名)
宗教指導者 (131 名)
地域に根差した医療関係者 (273 名)
プロジェクト委員会 (28 名)
村指導者・村落行政長官 (126 名)
住民指導者 (55 名)
村長 (42 名)
研修トレーナー (ToT) (17 名)

2-1-2. フォローアップ研修

事業期間中、以下の対象者をフォローアップ研修した。詳細は、Appendix G を参照。

村行政長官 (86 名)
研修トレーナー (ToT) (16 名)

計画 活動 2-2. 各村で行動変容にかかわる啓発活動を行うコミュニティー・エデュケーター (CE) 110 人を育成する。

実績

2-2-1. 研修

事業期間中、コミュニティー・エデュケーター 125 名 (インゲレンゲレ郡 72 名、ムラリ郡 53 名) を研修した。詳細は、Appendix H を参照。

2-2-2. フォローアップ研修

事業期間中、コミュニティー・エデュケーター 125 名をフォローアップ研修した。詳細は、Appendix H を参照。

2-2-3. 定例会合

以下の定例会合を実施した。会合では、報告書の締め切り厳守、研修への参加厳守、行政と他のボランティアとの協力関係強化などが話し合われた。詳細は、Appendix H を参照。

2-2-4. マニュアルの作成

第 2 年次、HIV/AIDS 研修マニュアル 120 部を印刷し、コミュニティー・エデュケーターに配布した。様々なトピックスでコミュニティー・エデュケーターへの参考となるように、また HIV/AIDS と性感染症についての正確な知識を全コミュニティーに伝えるように、マニュアルは作成された。内容は、HIV/AIDS の基礎情報、ライフ・スキル、リプロダクティブ・ヘルス、性感染症、家庭介護、カウンセリングやコミュニケ

ーションスキルなどを含んでいる。

第3年次、マニュアルの改訂を行った。1-3-5.参照。

2-2-5. 行動変容コミュニケーション・介入(BCCI)活動用教材

第1年次、ポスター1,300部、パンフレット2,000部を印刷し、配布した。ポスターには、「誰かがエイズに感染しているのを見て見ぬふりはできない」「親も子供たちとエイズについて語ろう」「青少年たち、君たちの間でもエイズについて話し合おう」といったメッセージが書かれている。

第2年次、動変容コミュニケーション・介入(BCCI)活動用マテリアルとして3種類の違ったメッセージを印刷したTシャツ850枚と帽子850個を作成。300枚には、HIV/AIDSとの闘いに青年が参加するよう「HIV/AIDS is a battle; youth are the soldiers, fight」というメッセージ。さらに300枚には、HIV/AIDS問題に女性に関心を持つよう「HIV/AIDS is threat to women development; Fight」というメッセージ。残りの250枚には、コミュニティーで偏見が減るよう「Even you, you're in danger of being infected with HIV/AIDS; stop stigma」というメッセージを盛り込んだ。

第3年次、2005年12月19日～23日の5日間、専門家5名を招き、BCCI教材の調査、デザイン、プリテストを行った。その結果を元に、カレンダー1,000枚、ステッカー800枚、Tシャツ800枚を作成し、配布した。

2-2-6. ビデオショー上映

2005年8月17日～19日にモロゴロにてビデオ上映研修を実施した。中間評価やモニタリングを通して、ビデオ上映を望む声が多かった。研修には、各郡から、コミュニティー・エドューケーター2名、リソースセンター・スタッフ2名、学校に通わない若者2名、計12名が参加した。ビデオ上映機材の使用法を習得し、ビデオ上映をどのように啓発教育へ取り入れていくかを学んだ。研修最終日に、ムラリ郡キペラ村にて、習得した技術を実演した。約500名の観客を前に、演劇と質疑応答を行い、ビデオ上映を実施した。

計画 活動 2-3. HIV/AIDS リソース・センターを事業対象地域に設置し(ンゲレンゲレに1ヵ所、ムラリに1ヵ所)、CE、カウンセラー、ピア・エドューケーター、及び周辺住民に HIV/AIDS に関する情報を提供する。また、リソース・センター係員を育成する。

実績

2-3-1. HIV/AIDS リソースセンターの設置

ンゲレンゲレとムラリにて、各コミュニティー・リーダーによって、リソースセンターを設置する各村が選ばれた。これらは他の村からのアクセスを考慮して選定された。同センターは、特に青年層のために HIV/AIDS に関する重要な情報を提供することを意図している。青年に魅力的で親しみやすい場所とするため、同センターには、様々なゲーム、図書室、テレビ、ビデオなどが設置される。

建設工事は2004年9月に始まったが様々な問題に直面し、2005年12月にムラリの建設が完了した。これにより、青少年が啓発教育ビデオや教材などを通して、地域での啓発教育に参加し、HIV/AIDS に関して正しい知識を身に付ける環境が整備された。2006年11月にンゲレンゲレの建設も完了した。

2006年6月2日、国家行事である独立トーチがムラリ・リソースセンターを訪れた。ムボメロ県選出の国会議員、州知事、県知事、県行政長官、約200名の住民やメディアが見守る中、トーチのリーダーが公式に開館を宣言した。独立トーチは、広報効果が非常に高いため、リソースセンターを利用する住民にとって重要なイベントとなった。

2-3-2. リソースセンター係員へのスタディツアー

2004年9月1日～14日(14日間)、リソースセンターの円滑な運営のため、住民から選ばれた8名(男4名、女4名)に対してセンターの主要目的や事務管理などの研修を実施した。

2006年1月30日～2月4日、リソースセンター係員8名に対して、ダルエスサラームとドドマにスタディツアーを実施した。ダルエスサラームでは、現地NGOのUMATIが運営する青少年センターとタンザニア・ペンテコステ教会が運営するAmana Vijana Centreを訪問した。また、ドドマでは、ドドマ県主催のMambo Poa Clubとタンザニア聖公会が運営するMackay House VCT Centreを訪問した。参加者は、リソースセンターを運営するために必要な知識と技能を訪問したセンターから学ぶことができた。

2-3-3. 運営の補助

2006年2月20日にンゲレンゲレで、21日にはムラリで、各リソースセンター運営委員会が選出され、実際の運営を開始した。

計画 活動 2-4. 演劇やスポーツ大会などのイベントを各村で年に2回ほど実施し、住民への啓発教育を行う。

実績

2-4-1. キックオフイベント

JICAタンザニア事務所との協議の上、2004年2月25日にンゲレンゲレ村においてプロジェクトの始動セレモニーを行った。セレモニーには保健省大臣や日本国大使、JICAタンザニア事務所長、モロゴロ州政府の医療関係高官、県政府の関係者、ワールド・ビジョン・タンザニアの代表等が出席した。セレモニーには多くの村人が集まり、HIV/AIDSへの各政府や団体の取り組みやコミュニティーとしてのHIV/AIDS対策の必要性について、参加者のスピーチを熱心に聞き、またプロジェクト活動に参加しているボランティア・グループによるHIV/AIDSを題材とした寸劇や歌などによる啓発を行った。

また、セレモニーの事前の2月18日に記者会見を行い、20社のメディア関係者が集まり、テレビ局四局、ラジオ局六局、新聞社10社が本事業やセレモニーについて取り上げた。また、セレモニーの開催にあたり、2月19日に対象地域を管轄する各政府関係者を招いてプロジェクト活動内容の説明を行った。州知事や県知事、州レベル、県レベルの保健医療の関係者、JICA専門家、地元NGO等が参加し、今後のプロジェクト活動への協力の約束を得た。

2-4-2. イベント

2004年2月22日から3月10日までサッカー、ネットボールの勝ち抜き試合を開催し、その中でHIV/AIDSの啓発教育を実施した。村毎で実施した上で、それを越えたトーナメントを実施した。コミュニティー・エドゥケーターと学校に通わない若者のピア・エドゥケーターは、合唱、劇、詩の朗読などを通して保健教育のメッセージを伝える機会を持った。また、期間中、観客にHIV/AIDS予防教育のBCCI活動マテリアルであるパンフレットやポスター等を配布した。コミュニティーのボランティアは、Tシャツと帽子を着て3つの違ったメッセージを伝えた。ンゲレンゲレの最終日には、郡行政官が以下のメッセージを参加者に伝えた。「コミュニティーでのHIV/AIDS感染率を減らすため、今こそ住民が得た知識を実際に利用する時期です」。

2-4-3. ビデオショー研修

2005年8月17日～19日にモロゴロにてビデオ上映研修を実施した。中間評価やモニタリングを通して、ビデオ上映を望む声が多かった。研修には、各郡から、コミュニティー・エドゥケーター2名、リソースセンター・スタッフ2名、学校に通わない若者2名、計12名が参加した。ビデオ上映機材の使用法を習得し、ビデオ上映をどのように啓発教育へ取り入れていくかを学んだ。研修最終日に、ムラリ郡キペラ村にて、習得した技術を実演した。約500名の観客を前に、演劇と質疑応答を行い、ビデオ上映を実施した。

計画 活動 2-5. コンドーム配付システムの促進を支援する。

実績

県保健行政事務所などの協力を得て、コミュニティー・エデュケーターなど住民ボランティアを通じた配布方法を確立した。

成果 3

若者や女性を HIV/AIDS 感染の危険から守るための環境が整う。

計画 活動 3-1. 各学校で HIV/AIDS 啓発教育が行われるよう学校委員会委員 156 人のトレーニング及びフォローアップを行う。

実績

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix I を参照。

学校委員会 (197 名)

計画 活動 3-2. 学生と女性の間で知識が広がるよう学生・女性ピア・エデュケーター 222 人を育成する。

実績

3-2-1. 研修

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix I を参照。

小学生ピア・エデュケーター (275 名)

中高生ピア・エデュケーター (32 名)

女性ピア・エデュケーター (84 名)

3-2-2. 資材供与

第 1 年次、男子生徒用サッカーボールと女子生徒用ネットボールを 1 つずつインゲレンゲレの 12 校の小学校に提供し、スポーツ大会の際に同時に HIV/AIDS や STI についての保健教育を行うことを支援した。

第 2 年次、小学校 40 校 (インゲレンゲレ郡 20 校、ムラリ郡 20 校) に対してボール 80 個を 8 月に配布した。これにより、生徒たちが一緒になって運動し、学生ピア・エデュケーターと学校の HIV/AIDS クラブから HIV/AIDS についてのメッセージを受け取る機会が持てた。「スポーツ用品は他の生徒たちと交流することを促してくれる」と学生ピア・エデュケーターは述べていた。

3-2-3. 学校間イベントの開催

第 1 年次、28 校の小学校および 4 校において、エッセイコンテストおよび絵画コンテストを実施した。上位入賞者は前述のプロジェクトセレモニーにおいて表彰された。

第 2 年次、24 校の小学校を対象にしたスポーツイベントを 8 月に開催した。イベントでは、HIV/AIDS のメッセージを伝えるためサッカー、ネットボール、歌、伝統的踊りが行われた。メッセージを通じて、HIV/AIDS の感染仕組みと予防方法が伝えられた。イベントの最終日には、優勝者に表彰状が贈られた。

2006 年 1 月 21 日にムラリ郡のムズンベ中学校で、2 月 24 日にインゲレンゲレで、学校間の啓発イベントを開催した。学生たちは、青少年と HIV/AIDS についての講習を受けた。また、ヒップポップ、伝統的踊り、討論を通じて HIV/AIDS についてのメッセージを聞いた。さらに、野外で、サッカー、ネットボール、バスケットボールを開催した。インゲレンゲレでのイベントに出席していたモロゴロ県保健行政官は、「この事業が終了した後もこのようなイベントを我々が続けて開催できるよう県行政も考えるべきだ」とコメントした。

計画 活動 3-3. 貧困が原因で学業が続けられない女子学生に対して奨学金を提供し、ドロップアウトを防止する。

実績

第1年次、20名の中学生に対し、奨学金の支援を行った。選考に際しては、女子学生を優先として、エイズ孤児や親が HIV 感染者である子ども、親が未亡人であったり障害や高齢などにより経済的に困難であることなどを基準として学校委員会や各村の協議によって選ばれた。対象の学生には、授業料の他、学校から各生徒に指示される制服やノート、寮生活のためのベッド用マットやシーツなどを支援した。

第2年次、既存の20名に加えて、新規に15名の生徒を追加した。当初10名を予定していたが、今年度より授業料が半額になったため予算内で支援数を増やすことにした。夏休み中の7月には、学校での様子を生徒の口から聞くために、プロジェクトスタッフが奨学金生を訪問した。全員、学校では特に問題なく過ごしていた。ある生徒からは、「母親が重病で学費を払う余裕がなかったので、今回の支援がなければ、中学校に行くことができませんでした」と話した。

第3年次、HIV/AIDS 遺児などの HIV/AIDS の影響を大きく受け、極貧の生活を強いられている中学生48名(男子25名、女子23名)に奨学金支援を行った。支援内容は、授業料(寄宿制の場合は、滞在費を含む)、制服、文房具などである。完成が遅れていたメレラ中学校が6月に開校となり、昨年度支援予定の生徒10名(男子5名、女子5名)に奨学金支援を行うことができた。うち3名は HIV/AIDS 遺児、5名は片親が HIV 感染者、親が障害者のために学校に通えなかった生徒である。2006年3月3日～10日、奨学金生が通う中学校7校を訪れ、38名に実際に面談して状況を確認した。奨学金によって、生徒たちの意識に変化が見られ、建設的な将来像をもってきている。また、ほとんどの生徒が学校で非常に良い成績を収めており、学級で1位の生徒もいた。

計画 活動 3-4. 学校に通わない若者に対して彼らの間で知識が広がるようピア・エデュケーター86人を育成する。

実績

3-2-1. 研修

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix I を参照。

学校に通わない若者(177名)

3-2-2. イベント

学校に通わない若者を対象に、サッカーとネットボールの試合が Tangeni 村と Changarawe 村で開催された。試合の開催中、2つの村の学校に通わない若者のピア・エデュケーターによって、劇、パンフレット、ポスターを通して HIV/AIDS と性感染症の情報を伝えた。今後、この方法を他の村でも引用していく。

計画 活動 3-5. 女性や若者に対する職業訓練を行い、小規模事業による経済的自立を支援する。

実績

3-5-1. 調査

コンサルタント(Ms. Zawadi Bella)により、所得創出活動(IGA)計画の詳細を得るための調査が行われた。調査結果報告書は、2004年12月に提出された。

3-5-2. 研修

2005年2月21日から25日に受益者グループの選定が、ムボメロ県及びモロゴロ県の各社会開発行政官の協力を得て行われた。これにより、まず20グループ(ンゲレンゲレ10、ムラリ10)が選定され、研修を行った。その後、IGA調整員がさらに調査・開拓を行い、さらに多くのグループに研修を行った。

小規模ローングループ(209名)

3-5-3. 物品提供による小規模ローン

当事業終了後にはワールド・ビジョンの総合地域開発プログラム(ADP)やCBOが引き継いでいくため、長期的な管理体制の確立に調整を要し、ローンは2006年4月から開始になった。総額8,137,140タンザニア・シリング相当の物品を小規模ローングループ13団体(ンゲレンゲレ5団体、ムラリ8団体)に提供した。詳細は、Appendix Jを参照。

また、物品により返済開始時期が多少異なるが、2006年6月から返済が始まった。詳細は、Appendix Jを参照。

3-5-4. HIV感染者への研修

2006年6月に簡単な説明会を実施した。その後、定例会合で研修を実施した。研修後にビジネスプランを提出してもらう予定であったが、提出時期が遅くなり、事業期間内にローンを実施する事はできなかった。

3-5-5. ワールド・ビジョン関係者への研修

当事業を引き継ぐ総合地域開発プログラム(ADP)の関係者に小規模ローンについての研修を行った。2006年10日にムラリ、4月19日にンゲレンゲレで開催した。

3-5-6. AICADとの連携

本ローンのグループでビジネスを拡大させる意思のある者たちを、JICAが支援する地域国家組織「African Institute for Capacity Development (AICAD)」に紹介した。2006年6月、AICADスタッフが彼らを訪問し、支援の対象者となるかを審査した。2006年7月、AICADが主催する企業家育成研修に招待され、ビジネスを発展させる方法を学んだ。

成果 4

マサイ族や移動を伴う人々(トラックドライバー、ゲストハウスワーカー等)を HIV/AIDS 感染の危険から守るための環境が整う。

計画 活動 4-1. 対象地域に住む少数民族であるマサイ族 130 人に対して、ピア・エドゥケーターや訓練者(ToT)の育成を通じた予防啓発活動を実施する。

実績

4-1-1. マサイ族酋長との会合

第 2 年次、研修に先立ち、マサイ族コミュニティへの導入として、ンゲレンゲレとムラリにてマサイ族長老たちとの会合を持った。議題は、プロジェクトの概要やプロジェクトにマサイ族コミュニティを含める必要性などであった。

2005 年 7 月 19 日にムラリにて、7 月 22 日にンゲレンゲレにて、マサイ酋長ほかリーダー 20 名(各 10 名)と会合を持った。マサイのコミュニティへのより深い介入を図るためである。酋長や他のリーダーたちは、マサイのコミュニティにおいて非常に大きな影響力を持っている。他の地域の事例をみても、彼らによる HIV/AIDS 対策教育がマサイの行動変容をもたらしている。会合を持った酋長やリーダーたちは、喜んで当事業の活動への参加を引き受けてくれ、積極的な協力を約束してくれた。

4-1-2. ビデオ上映

2005 年 8 月 10 日、ムラリ郡マンガエ村にてビデオ上映会を開催した。STI、HIV/AIDS、コンドームの使用促進についてのビデオを上映した。約 200 名のマサイ族が集まった。上映後、観客から HIV/AIDS と STI について多くの質問が出た。質問には、マンガエ村のコミュニティ・エドゥケーターが回答をした。また、村でコンドームが確実に購入・利用できる環境になるよう、マサイ族からの支援要請があった。

4-1-3. 研修

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix K を参照。

マサイ族男性ピア・エドゥケーター(48 名)

マサイ族女性ピア・エドゥケーター(28 名)

マサイ族青年ピア・エドゥケーター(39 名)

マサイ族酋長(24 名)

4-1-4. フォローアップとスタディツアー

2006 年 7 月 24 日～25 日、マサイ族酋長らリーダー 16 名に対してフォローアップ研修を実施した。7 月 26 日～29 日、16 名のうち 8 名を選別し、ワールド・ビジョンマニャラ州シマンジロ県で行っている COMOCAH (Community Mobilisation Comprehensive Approach to HIV/AIDS) 事業へのスタディーツアーを実施した。同事業は、マサイ族とタンザナイト鉱山労働者を対象にした HIV/AIDS 対策活動であり、同地の酋長らリーダーが積極的にエイズ予防・啓発教育活動を行っている。今回ツアーに参加した酋長らリーダーは、多くの事を学んだ。

計画 活動 4-2. ゲストハウスやバーの店員など、リスクの高い移動人口 120 人に対する研修や予防啓発活動を実施する。

実績

4-2-1. 研修

事業期間中、以下の対象者を研修した。詳細は、Appendix K を参照。

ゲストハウスとバーの店員(122 名)

4-2-2. 行動変容コミュニケーション・介入(BCCI)

2006 年 1 月 9 日～13 日の 5 日間、専門家 5 名を招き、BCCI 教材の調査、デザイン、プリテストを行った。その結果を元に、トラック運転手とバーメイド用ポスター 3,000 枚と木炭販売者用のポスター 3,000 枚を作成し、コミュニティー・エデュケーターの協力の下に配布した。

2006 年 10 月、BCCI 用看板 10 枚をトラック運転手が宿泊する頻度の多い 9 つの村に設置した。Sanga Sanga 村、Vikenge 村、Changarawe 村、Kipera 村、Mlali 村、Mangae 村、Doma 村、Tangeni 村の 8 村には各 1 枚、Melela 村には 2 枚設置した。

<プロジェクト運営委員会および実施体制>

各委員会は事業期間中、定期的に会合を持った。組織図は、Appendix L を参照。また、ワールド・ビジョンの実施体制は、Appendix M を参照。

1. 共同調整委員会 (Joint Coordination Committee (JCC))

- ①2004 年 6 月 3 日 (モロゴロ)
- ②2004 年 12 月 15 日 (ムラリ)
- ③2005 年 7 月 20 日 (ンゲレンゲレ)
- ④2006 年 2 月 8 日 (モロゴロ)
- ⑤2006 年 10 月 27 日 (モロゴロ)

(各議事録参照)

2. 運営委員会 (Steering Committee)

- ①2004 年 5 月 28 日 (モロゴロ)
- ②2005 年 1 月 19 日 (モロゴロ)
- ③2005 年 8 月 12 日 (モロゴロ)
- ④2006 年 1 月 13 日 (モロゴロ)
- ⑤2006 年 11 月 2 日 (モロゴロ)

3. 四半期地域小委員会 (Sub-Committee①②⇒Field Committee③)

- ①2004 年 5 月 26 日 (ンゲレンゲレ、ムラリ)
- ②2004 年 7 月 (ンゲレンゲレ、ムラリ)
- ③2004 年 11 月 13 日 (ンゲレンゲレ)

2004年12月10日(ムラリ)

④2005年1月19日(ンゲレンゲレ)

2005年1月20日(ムラリ)

⑤2005年7月8日(ンゲレンゲレ、ムラリ)

⑥2005年12月19日(ンゲレンゲレ、ムラリ)

⑦2006年1月25日～27日(ンゲレンゲレ、ムラリ)

事業終了後の管理・持続性を考慮し、Sub-Committee(構成員:分野を問わない住民や行政官)を、Field Committee(構成員:各村で HIV/AIDS に関して中心的な役割を担う村落 HIV/AIDS 委員を中心に)に改編した。

⑧2006年9月12日(ンゲレンゲレ)

2006年11月3日(ムラリ)

<その他の活動>

1. モニタリング

コミュニティー・ボランティアから送られてくる月例報告書を元に各地域での進捗状況を確認した。また、プロジェクトスタッフによるモニタリングをンゲレンゲレとムラリの 45 全ての村で行い、プロジェクトの進展状況を評価した。各コミュニティー・ボランティアが自分たちの役割を果たしていること、各村の政府関係者との協力関係が良好なことなどが確認された。

2. 中間評価

2005年5月、HIV/AIDS 専門家である Krishna Poudel 氏(東京大学所属)を評価チームリーダーとして、中間評価を実施した。当事業はいくつかの目標指標を達成しており、大きな進展があると評価を受けた。詳細は、中間評価報告書を参照。

3. 事務所移転

2005年6月に事務所を移転した。より広い空間が得られ、来客と会合を持ったり、支援物資を保管できるようになった。

4. 他事業視察

2005年8月3日、プロジェクト・マネージャーとチームリーダーが、ワールド・ビジョンがマニャラ州シマンジロ県で行っているCOMOCAH (Community Mobilisation Comprehensive Approach to HIV/AIDS)事業を視察した。同事業は、タンザナイト鉱山労働者とマサイ族といった移動人口を対象にHIV/AIDS対策活動をしており、当事業もその成功から学ぶところが多かった。

5. プロジェクト・デザイン・ドキュメント

2005年12月5日～9日(5日間)、専門家7名を招き、当事業のプロジェクト・デザイン・ドキュメン

トを作成した。本書類は、ベースライン調査と中間評価から情報を集めたものである。また、当事業実施における全ての関係者の責任を記している。

6. 事業終了後への準備

①引継ぎ会合 (Multi-Sectoral Meeting)

2005年12月21日、ンゲレンゲレ及びムラリにおいて各地域の関係者を招き、第1回引継ぎ会合を開催した。出席者は、政府高官、村落開発委員会、村落政府職員、宗教指導者などである。本会合では、出席者から多くの有益な意見や助言をもらった。また、今後実際に引継ぎを担っていく地域小委員会を立ち上げ、委員の選出も行った。四半期地域小委員会 (Sub-Committee) を地域小委員会 (Field Committee) に改編した。

②持続可能性会合 (Sustainable Meeting)

2006年2月15日、モロゴロにて、HIV/AIDS 担当行政官、HIV 感染者を支援する NGO、VCT カウンセラー、コミュニティー・カウンセラー、HIV 感染者を招き、当事業終了後の持続的な HIV 感染者支援を話し合った。

③来年度活動計画及び予算会合

2006年2月3日、Harun Machibya 氏 (モロゴロ県保健医療行政官) と活動計画案と予算について協議した。当事業から県行政に引き継ぐ活動について、政府次年度 (2006年7月から2007年6月) 計画と予算に組み込んでもらうため行った。なお、ムボメロ県保健行政官は長期休暇のため、モロゴロ県保健医療行政官が兼任していた。

④最終引継ぎ

県保健行政およびワールド・ビジョン地域開発援助事業 (ADP) との調整を経て、2006年10月27日の第5回共同調整委員会で正式に引継ぎ事項が確認された。詳細は、Appendix N を参照。

7. 最終評価

保健省の下部組織 CDEHA (Centre for Educational Development in Health, Arusha) の James Mwesiga 氏により評価が実施された。2006年6月12日～28日、10村 (各郡5村) で個別インタビューとフォーカス・グループ・ディスカッションを行い、県行政長官や県保健医療担当官や当事業関係者ともインタビューを行った。その後の分析、報告書案をもとに、ワールド・ビジョンと JICA タンザニア事務所で内容を確認し、10月に報告書は完成した。詳細は、最終評価報告書を参照。

8. JICA 終了時評価

2006年10月16日～27日、牧野耕司 JICA タンザニア事務所次長を団長とする終了時評価が実施された。詳細は、最終評価報告書を参照。

<効果>

JICA 終了時評価における評価 5 項目の結果、指標の結果は以下の通りである。また、日常の活動、モニタリング、中間評価及び最終評価から次の成果もみられた。

1. 評価 5 項目の結果 (JICA 終了時評価報告書の抜粋)

項目	評価結果
①妥当性	対象地域の高い感染率やタンザニア政府の方針などを鑑み、当事業の妥当性は高いと評価できる。
②有効性	当事業は、HIV 感染の危険性を減らし、HIV 感染者への社会的サポートを増やした。非常に有効に実施されたと評価できる。
③効率性	投入が成果につながり、大変献身的なボランティアが精力的に活躍し、成果も目標に達していた。当事業は、効率的に実施されたと評価できる。
④インパクト	HIV や STI の感染の減少といったインパクトは明確に計ることができなかったが、コミュニティと県保健医療制度に対して多大なインパクトを与える様々な改善を実施したことは評価できる。
⑤自立発展性	各関係者への引継ぎ計画が実施されており、各ボランティアの士気も高いため、自立発展性は確保され、事業成果は持続するものと評価できる。

2. 指標結果 (WV 最終評価)

	指標	成果
成果 1		
1-1	HIV 抗体検査のために VCT を訪れる人や、性感染症の診察、治療のために性感染症科を利用する人が増える。	2006 年 6 月末までに、1,790 名が VCT センターを訪れ、カウンセリングを受けた。離村で移動診療が実施され、巡回回数 658 回以上、2,693 名以上が診療を受けた。VCT カウンセラー16 名が育成された。コミュニティ・カウンセラー123 名が育成され、PLWHA のホームケアを実施した。
1-2	基礎保健サービス（保健所・ディスペンサリー等）や移動診療車により、日和見感染などの治療を受けられるエイズ患者が増える。	離村で移動診療が実施され、巡回回数 658 回以上、2,693 名以上が診療を受けた。
1-3	PLWHA の 80%が家族から適切な在宅ケアを受け、コミュニティカウンセラーからカウンセリングを受けられる。	HIV 陽性と診断された PLWHA が 100%、物資支援を含むホームケアを受けた。
成果 2		
2-1	対象地域のすべての村がそれぞれの HIV/AIDS 啓発教育プランを作り、活動を行う。	45 すべての村で啓発教育プランを組み、実施している。
2-2	住民の 85%が基本的な HIV 感染の予防法やコンドームの入手先を知る。	96.81%が 1 つ以上の予防法を知っている（98.6%中間評価、53.9%ベースラ

		イン)。91.10%がコンドームの入手先を知っている（99.8%中間評価、61.4%ベースライン）。
成果 3		
3-1	90%の小・中学校において HIV/AIDS 教育が実施される。	100%、計 53 校で実施されている。
3-2	学生及び学校に通っていない若者の間でピア・エドゥケーターが活動する。	学生 391 名及び学校に通っていない若者 177 名が研修を受け、活動を行っている。
3-3	経済的な問題を持つ家庭の女子がドロップアウトせずに勉学を続けられる。	対象となる中・高生 103 名に奨学金を支援した。
3-4	性に関する交渉スキルを身に付ける女性や少女が 50%増える。	コンドームを使うようパートナーを説得できる女性が 25.60%（中間評価）から 64.29%（最終評価）に増えた。
成果 4		
4-1	マサイ族リーダーの 75%が HIV/AIDS の知識を身につけ、マサイ族の間で啓発活動を積極的に促進するようになる。	ターゲット地域のすべてのリーダー20名が研修を通して正しい知識を身につけ、啓発活動を積極的に取り組んでいる。
4-2	マサイ族の間でピア・エドゥケーターが活動する。	115 名が研修を受け、啓発活動を行っている。
4-3	移動を伴う人々が基本的な HIV 感染の予防法を知り、実際にコンドームにアクセスする人が増える。	移動性が高いため、対象者をモニタリングできなかった。

3. モニタリング等を通して見えた成果

成果1 性感染症及び HIV/AIDS に関する政府の基礎保健システムが強化され、また PLWHA への家庭介護システムが確立される。

1-1. 各 VCT センターには、総選挙や日照り等があったにもかかわらず、昨年度以上に住民が HIV 抗体検査を受けに来た。

1-2. 約 30 名の HIV 感染者が、自分の HIV 陽性をコミュニティに公表し、自分たちの組織を編成するようになった。カウンセリングの効果や偏見の減少など、当事業の活動が相乗効果をもたらしている。

1-3. HIV 感染者が、CD4(陽性リンパ球)検査を受けに、モロゴロ州で唯一検査機がある県立モロゴロ病院まで自主的に来るようになった。検査結果によって、政府が提供する HAART 療法を受ける HIV 感染者が増えている。

1-4. 各診療所で、STI 診察数の減少が見られた。長期的に推移を追わなければならないが、行動変容を知る指標となる。

1-5. メレラ VCT センターが、他の 2 つの VCT センターに先駆けて、母子感染予防 (PMTCT) を開始した。

成果2 住民が地域での啓発教育に参加し、HIV/AIDS に関して正しい知識を身に付けるようになる。

2-1. 全ての村で BCCI 計画が立てられるようになった。コミュニティー・ボランティアは、月に一度集まり、予定策定を行っている。また、村落行政に計画を相談し、実施に関する支援などを要請している。

2-2. リソースセンターが完成し、住民に正しい情報を発信する環境が整った。

2-3. 研修トレーナーが、研修で得た知識を活かし、近隣の軍基地など外部機関の主催する HIV/AIDS 講習会に招かれるようになった。

成果3 若者や女性を HIV/AIDS 感染の危険から守るための環境が整う。

3-1. 研修を受けた教師や生徒が、他の生徒たちに教える環境が整っている。生徒たちは、さらに家族や近所の人々にも情報を伝えている。小学生や中学生による HIV/AIDS クラブも自主的に活動している。

3-2. 小学校における早期妊娠数の減少が見えた。ムラリ小学校などでは、毎年数名いたが、この 2 年間は 0 名であった。長期的に推移を追わなければならないが、行動変容を知る指標となる。

成果4 マサイ族や移動を伴う人々 (トラックドライバー、ゲストハウスワーカー等) を HIV/AIDS 感染の危険から守るための環境が整う。

4-1. マサイ族リーダーを中心に、マサイ族コミュニティーへの啓発教育が始まった。

4-2. ゲストハウスやバーの店員は、感染手段を理解しており、感染予防策として、自制、コンドームの使用、特定の相手との性交渉を挙げている。(中間評価報告書)

<問題点と対策>

成果1

1-1. 診療所に寄贈したネビラピンの使用状況が低い。使用期限内に各診療所が使用することが不可能となり、ドドマの ART 施設「Village of Hope」に使用期限の近いネビラピンを移転した。(打合簿参照)

1-2. 偏見が根強く、ある HIV 感染者は周囲の人々に HIV/AIDS と知れてしまうので援助物資を拒んだり、家族や親戚がコミュニティー・カウンセラーの訪問を拒否することもあった。コミュニティー・カウンセラーが、家族や親戚にも HIV/AIDS への理解を促すよう訪問して説得していく。

1-3. 離村の住民は、VCT センターのある村まではアクセスが悪く、なかなか訪れることができない。試験的に移動 VCT サービスを行い、県保健行政と今後の対策を検討する。

1-4. CD4 検査と HAART 治療のできる施設が、県立モロゴロ病院にしかないため、HIV 感染者の各郡からの移動が問題である。公共交通機関を利用するにしても、HIV 感染者の経済状況を考えると困難である。県保健行政と関連 NGO などと対策を検討する。

成果2

2-1. 政府主導のコンドーム配布は、うまく機能していない。在庫管理の問題などもあり、住民の需要に供給が追いついていない。コミュニティー・ボランティアや他団体の協力を得て、配布のシステムができるよう働きかけていく。

成果3

3-1. 研修を受けた教師や生徒が、転勤や卒業のため、いなくなってしまう。学校がコミュニティー・エデュケーターと連携したり、県教育行政やワールド・ビジョン ADP(地域開発援助事業)が引き続き新たな教師や生徒を育成していくことを検討している。

3-2. 奨学金生の何人かの親や保護者が、自己負担分の学費等を払っていない。このため、生徒は学業に専念できず、良い成績を残せていない。親や保護者と話し合い、彼らの貢献を促すようにする。

3-3. 現金に比べて、物資提供による小規模ローンにコミュニティーの関心が非常に低い。興味のあるグループだけに貸し付け、事業終了後に現金によるローンに移行するよう調整を行う。

成果4

4-1. 中間評価によると、ムラリのマサイ族は、HIV/AIDS の知識が弱く、感染手段と感染予防について正確に理解していない。一方、ンゲレンゲレのマサイ族は、感染手段と感染予防を知っているが、別の性交渉相手の際にコンドームを使用していないことが多い。他事業の成功例から、マサイ族酋長やリーダーを研修トレーナーとして育成し、各マサイ族コミュニティーに教育するように働きかけていく。

4-2. バーメイドもゲストハウスワーカーも研修後、別の地域に移転するケースが多く、啓発教育が定着しない。トラック運転手らが立ち寄る可能性の高い村々で行動変容教材を配布していく。

<関係者のコメント> (抜粋) (敬称略)

成果1

1-1. モロゴロ県保健医療官 Harun Machibya

「日本政府、JICA、ワールド・ビジョン・ジャパン、そしてワールド・ビジョン・タンザニアのインゲレンゲレ及びムラリの総合地域開発プログラム(ADP)に感謝の意を表したいと思います。本事業への価値あるご支援は決して忘れることができません。また、当事業の実施に向け動いてくださった保健省と社会福祉省にも感謝致します。さらに、われわれ県評議会が当事業に参加できるように配慮された首相府、州行政府、地方政府にも特別な謝意を表したいと思います。最後に、当事業を成功させるために献身的に働かれた当事業スタッフにもお礼を申し上げたいと思います。」

1-2. HIV 感染者 Rose Moses (インゲレンゲレ郡)

「私は受益者という立場から当事業の支援を大変喜んでいます。インゲレンゲレの他の住民と同様、当事業が開催する研修や会合を通して、HIV/AIDS に関する正しい知識と技能を得ました。また、私は HIV 感染者として、当事業が他の HIV/AIDS 犠牲者に施しているサービスを無料で受けています。当事業は、食糧の他、ベットシーツ、毛布、石鹸などの日用品を提供してくれています。HIV/AIDS の犠牲になってからは、労働意欲が低下し、家計収入も減ってしまいました。私の経済状況からすると、当事業の物資支援は、私と家族にとって大変助かる支援となっています。当事業によって知識と支援を得たお陰で、犠牲者ではありますが、自信と希望を持って生きています。私と家族の収入だけでは、この感染症を治療にかかる様々な費用を賄うことは不可能だったでしょう。最後に、HIV 感染者への支援、HIV 感染者のグループを作るという活動に感謝します。私たち HIV 感染者は、他の HIV 感染者と集い、考えを分かち合っています。」

成果2

2-1. 訓練者(ToT) Ramadhani Shuka (インゲレンゲレ郡)

「当事業のボランティアとして、他のボランティアたちと共に、我々のコミュニティーで HIV/AIDS 啓発活動を実施しています。非常に多くの住民が、感染方法、感染予防、感染者との接し方、HIV 感染者への差別の削減、HIV 感染を広める危険な行動の回避方法を周知しています。これは当事業のお陰です。住民もボランティアも、当事業がもたらしてくれた知識に感謝しています。また、我々は、HIV 感染との戦いの最前線で当事業と協力していくことを誓っています。」

2-2. コミュニティー・エドゥケーター Monica Mtepe (インゲレンゲレ郡)

「HIV/AIDS との戦いで他の人々を指導する点で、私は自分のコミュニティーにおいてコミュニティー・エドゥケーターとして良い例でしょう。他のボランティアと共に、私たちの村で HIV/AIDS に関する情報普及をいつも行っています。毎月、行動計画を立案し、それに基づき HIV/AIDS 教育を実施しています。短期的に当事業の評価をするのは難しいと思いますが、性行動に大きな変化が見えてきました。HIV 感染を広める危険な行動を認識できるようになりました。」

成果3

3-1. 奨学金生 Happiness Charles (イファカラ女子中学校 3 年生(日本:高校 1 年生))

「私の父は HIV/AIDS で亡くなり、母は HIV 感染者です。経済的に貧しい環境下にあります。このプロジェクトは、授業料やその他の学費や学用品を私の学校に直接支払ってくれて私を支えています。また、時々、学校を訪れて、学業の進展状況や抱える悩みを聞いてくれます。正直言って、この支援がなければ、母と(親戚など)保護者では学費を払うことはできなかったでしょう。また、学校に通わず村に残っていたら、多くの生活苦や様々な誘惑に面していたでしょう。勉強が続けられ、良い成績を残せるのも、この奨学金のお陰です。また、この奨学金の課お陰で、母が学用品やお小遣いや身の回りの物をくれるようになりました。」

成果4

4-1. マサイ族酋長 Joseph J. Mameo (ンゲレンゲレ郡)

「私は、マサイ族酋長として、研修で得た知識と技術を私のコミュニティーの者たちと共に共有しています。マサイ族は、HIV/AIDS 啓発が遅れている唯一の移動集団です。我々のコミュニティーは、我々の習慣や伝統にとっても強く種族的に密着しています。その習慣や伝統が HIV 感染を広める場合もあります。しかし、外部の人がそれを変えようとするのが難しいかもしれませんが、私や私の仲間が種族のリーダーとしてマサイ族コミュニティーに HIV/AIDS 教育を浸透させるのは容易なことです。私はマサイ族のリーダーとして如何に HIV/AIDS と戦っていくかの戦略を既に用意しています。コミュニティーの者たちの中での HIV/AIDS 教育普及のために、我々は月間行動計画を立て、管理しています。最後に、マサイ族コミュニティーを代表して、当事業がマサイ族コミュニティーとンゲレンゲレの人々に偉大な啓発をもたらしてくれたことに感謝を表します。」

写真は、Appendix O を参照。

<プロジェクト資機材リスト>

- 車両 1 台
- オートバイ 2 台
- 事務所用インターネット衛星皿 1 台
- 事務所用コピー機 1 台
- デスクトップコンピューター 2 台
- ラップトップコンピューター 3 台

以上

添付資料:

- Appendix A: VCT センター統計
- Appendix B: 医療資材供与リスト
- Appendix C: 巡回診療統計
- Appendix D: VCT カウンセラー研修参加リスト
- Appendix E: 医療関係者研修
- Appendix F: コミュニティー・カウンセラー研修
- Appendix G: 影響力のある住民研修
- Appendix H: コミュニティー・エデュケーター研修
- Appendix I: 若者・女性研修
- Appendix J: 小規模ローン情報
- Appendix K: マサイ族・移動人口研修
- Appendix L: プロジェクト委員会組織図
- Appendix M: WV 実施体制組織図
- Appendix N: 引継ぎ計画表
- Appendix O: 写真